

史跡 高松城跡

高松城は、かつて「讃州讃岐は高松様の城が見えます波の上」と謡われたように、北は瀬戸内海に面し、残り3方に堀を巡らせた海城で、日本三大水城の一つに数えられています。市街地にありながらも堀や石垣が残り、往時の姿をよく残していることから、国の史跡に指定されています。かつて天守が所在した「本丸」、本丸の北側に位置し、鞘橋で本丸と連結する「二の丸」、披雲閣及び披雲閣庭園が所在する「三の丸」、三の丸の南側に広がる「桜の馬場」、月見櫓（着見櫓）や渡櫓、水手御門が所在する海の玄関口としての「北の丸」、その東側で、現在北側と東側の一部を区画する石垣が史跡となっている「東の丸」、各曲輪を区画し、海水をたたえる「堀」とに分けることができます。

◆本丸

城内の中心に位置し、かつては東端には天守が存在し、南西隅に地久櫓、北西隅に矩櫓、本丸入口に中櫓と中川櫓が所在し、それぞれを多聞櫓でつなぎ、さらには周囲すべて堀に囲まれ、鞘橋だけで二の丸と連結されました。本丸内には生駒家時代や松平家時代の初期には御殿も所在していました。松平頼重は寛文10年（1670）に天守の改築を行っており、3重4階+地下1階で、最上階がその下の階より張り出す唐造り（南蛮造り）や1階が石垣より張り出しているなどの特徴を持っています。天守は明治17年（1884）に老朽化を理由に解体されました。なお、天守台石垣はその傷みが目立つことから、平成18～25年（1996～2013）にかけて解体修理が行われました。



天守古写真（公益財団法人松平公益会蔵）

天守は文献によると13間半（約26.6m）の高さがあり、屋根には高さ2mの鰐がついており、石垣基礎から鰐の上部までは約43mです。



発掘調査された天守地下1階

天守は取り壊されたのち、地下1階は埋立てられ、藩祖頼重を祀る玉藻廟が建築されていましたが、発掘調査でその姿が明らかになりました。



鞘橋

本丸と二の丸を唯一つなぐ橋です。当初は屋根がなく、らんかん橋と呼ばれていましたが、江戸時代の中期以降に屋根付きの橋になりました。

◆二の丸

北西に廉櫓と弼櫓、北東に武櫓と黒櫓、南西に文櫓と多くの櫓がありました。また、北東部の武櫓と黒櫓の間には鉄門が所在したほか、北西部には西の丸からの入口である刎橋口が設けられていました。本丸同様、生駒時代や松平時代の初期には御殿も所在していました。現在は、広場となっており、植木市などが開催されます。



披雲閣（旧松平家高松別邸）と庭園

◆三の丸

三の丸には藩主御殿が所在しました。また、藩主御殿の正門として、南側に桜御門が所在し、南東隅には龍櫓が所在しました。藩主御殿は現在三の丸に所在する披雲閣と同名ですが、その大きさは現在の2倍あったとされます。現在は、大正時代に建てられた重要文化財披雲閣と、同時期に作庭された名勝の披雲閣庭園が所在します。



焼失前の桜御門

国宝に指定されることが決定していましたが、昭和20年（1945）空襲により焼失しました。

◆桜の馬場

生駒家時代には桜の馬場中央南端に大手（古太鼓門）が設けられており、その西側には廄や藩士の屋敷などが所在し、東側には藩政を行う場所としての対面所がありました。その後、松平家による改修により、これらの施設はなくなり、桜の馬場の東端に新たに大手を設け、東西端に太鼓櫓、鳥櫓が作されました。現在も大手には高麗門の旭門が見られるほか、木橋から石橋に架け替えられてはいるものの、旭橋が大手の遺構として残っています。また、石垣をトンネル状に構築した埋門が見られ、柱など当時のものが現存しています。桜の馬場には、桜が植樹されており、花見などでぎわいます。



良櫓

延宝5年（1677）に東の丸北東隅にあった橋で、昭和42年（1967）に太鼓櫓台に移されました。3重3階、入母屋造、本瓦葺で、初重に見られる大きな千鳥破風と、城内側にも設けられたが鉄砲狭間が特徴です。



旭橋と旭門

城の大手の旭橋は、門に対し斜めに架かる筋違橋となっています。敵の直進を防いだり、敵に横方向から攻撃できる構造となっています。城内に入ると見事な切石によるモザイク状の石垣で囲まれた桝形となっています。

◆北の丸

松平頼重により寛文11年（1671）からの埋立てによって新造された曲輪で、2代頼常によって完成されました。渡櫓の石垣には継ぎ足した痕跡が残っています。北の丸の西端には延宝4年（1676）に建築された月見櫓（着見櫓）・渡櫓・水手御門が現存しており、いずれも重要文化財に指定されています。



月見櫓（着見櫓）・水手御門・渡櫓

月見櫓（着見櫓）は延宝4年（1676）に上棟された記録が残っています。他の2棟もほぼ同時期に建築された建造物です。現在、月見と表記していますが、本来は着見であり、到着を見る櫓です。3重3階、入母屋造、本瓦葺で、内部は4本の柱が3階天井まで伸びています。南側には海に向かって開く水手御門があり、藩主はここから参勤交代などに出かけました。さらにその南側の渡櫓は平櫓であり、生駒時代の海手門の一部を再利用しており、内部の壁に大壁・真壁・波型真壁の3つの壁構造を採用している珍しい櫓です。

◆堀

高松城は3重の堀に囲まれていましたが、市街化が進み、外堀は地割にその名残が見られるのみで、完全に姿を消してしまっています。現在、史跡として保存されているのは内堀と中堀の一部のみで、水門を通じて海水を引き込んでいるため、堀には鰐をはじめとする海水生物が数多く生息しています。

重要文化財 高松城と披雲閣

昭和22年（1947）に城内の良櫓・月見櫓・水手御門・渡櫓の4棟が現存する江戸時代の城郭建築であることから、高松城として国宝（昭和25年（1950）に文化財保護法施行により重要文化財となる）に指定されています。



大書院

また、大正時代に12代当主松平頼壽によって建築された披雲閣（旧松平家高松別邸）の本館・本館付倉庫・倉庫の3棟が近代和風建築の代表例として平成24年（2012）に指定されています。この際、裏門1棟、袖廊2棟、井戸屋形1棟、四阿2棟についても附（重要文化財に付属するもの）として指定されています。



そてつ
蘇鉄の間

披雲閣の各部屋は松の間・横の間・波の間など、その部屋から見える風景などから名前が付けられています。蘇鉄の間の北側には島津家から贈られたと言われる蘇鉄が見えます。